庶民の物見遊山

―人・モノ・心が行き交う大山道と大山二の鳥居―

神奈川県立公文書館　**川　島　敏　郎**

はじめに　―私と伊勢原との関わり

そもそも私が伊勢原と深い関わりをもつに至ったのは、三〇年間も続いている「伊勢原の古文書を読む会」（月一回）がきっかけである。その後、大山公民館での大山に関係した夏季講座（八月四回、二五年連続）の講師や市文化財保護委員の委嘱を受けるなどして、極自然に信仰の山・大山の研究に踏み込むようになった。二〇〇七～〇九年には、伊勢原市から「再発見大山道調査」団長も委嘱され、市内の歴史解説アドバイザーの方々のご協力を得て、市内を通る大山道等道標の悉皆調査を行い、昨年一二月には、その成果を基にして「伊勢原の大山道と道標」展と講演会を開催して好評を博した。

一　大山道に関連して

①古川柳にみる大山道

相模国の霊峰である大山に対する信仰は、庶民の物見遊山の隆盛にともなって、江戸中・後期（宝暦・明和・安永期頃）以降とみに高揚した。特に大山の例祭の時期（旧暦六月二七日～七月一七日）ともなると、江戸の中・下級の庶民らは様々な講を結成して、大川（隅田川）に架かる両国橋の袂（東詰）で七日間の千垢離を取って精進潔斎した後、一路大山を目指した（大山に向かうルートについては、東海道・中原街道・矢倉沢往還〈大山道・青山道〉・甲州道中を経由する大筋四つのルートがある。配布資料№２を参照）。彼らは白木綿の浄衣（行衣・御衣ともいう）と笠の出立ちで、ある者は木太刀・梵天・お神酒枠などを担いで、夜明け前に出立した。これを「山立ち（逆は「山帰り」）」という。ここでは大山信仰のキーワードとなる「大山道」に関係した川柳を幾つか紹介してみよう。

1　万年屋近所抜き身の客を待ち

注　万年屋―江戸後末期に川崎宿で最も栄えた旅宿のこと。
抜き身の客―大山参詣目当てのお客のこと。

2　茶の礼にさんげさんげを三度云ひ

注　茶―大山道中で振る舞われるもてなしのお茶のこと。

3　留女大山時分景気あげ

注　留女―旅人を宿屋に呼び込む客引き女のこと。

4　雨の降る山へ道者の蓑毛越え

注　雨の降る山―大山のことで、山号は雨降山（あふりさん）。
道者―富士山登拝後に蓑毛越えによる大山登山。

5　初山へ牛の角文字納め太刀

注　初山―大山例祭の六月二七～月末、又は初の大山登山。
牛の角文字―平仮名の「い」のことで、大山に奉納する木太刀（納め太刀）をこのように立てて歩行する様子。

6　山帰りあたり近所は笛だらけ

注　笛―大山詣の土産の一つに江戸大森の麦藁細工があった。

（掲載川柳は、「川柳万句合」「柳多留」「柳多留拾」等による。）

②伊勢原市内の大山道道標一覧

既述のように、伊勢原市文化財課の委嘱を受け、二〇〇七～〇九年に亘り、市内の道標悉皆調査を行った。市内の各所には大山道・金井（金目）道・日向道・飯山道・荻野道・八王子道・江の島道・

十日市場（曽屋）道等々と刻まれた道標が散在し、その総数は〇九年現在で一〇六基を確認することができた。その内、市内最古の道標は市内串橋木ノ元にある庚申塔に標記された「金井（金目）道」で、延宝八（一六八〇）年に建立されたものである。これに対して最新のものは、市内高森の個人宅脇にある「柏尾道」「門沢道」で、昭和三（一九二八）年に建立されたものであることが判明した。これらの道標の内から、「大山」「大山道」と標記されたもの、及び大山山内の道標を抽出すると、【表Ⅰ】「伊勢原市内大山道道標一覧（編年順）」のようになる。

この一覧表から明らかなように、「大山」「大山道」と標記された道標は、江戸時代二三基、明治時代四基、大正時代二基、不明一〇基を数える。一方の山内の道標は、江戸時代三基、明治時代五基、大正時代一基となっている。この内一番古い大山道道標は、享保一三（一七二三）年の建立で市内田中の耕雲寺境内にある。ここは県立伊勢原高校の近くで、矢倉沢往還と東海道経由柏尾通大山道の合流地点と至近距離にある。建立時期では宝暦・文化・天保期（一八世紀中頃～一九世紀中頃）が比較的多いが、この傾向は残存している古文書・古記録からも指摘されるところである。また、道標の種類では単なる四角柱（円柱は一基のみ、№035）をした道標が圧倒的多数（三二基、全体の約六七％）を占め、つづいて庚申供養塔（一三基、全体の約二七％）、二十三夜塔（二基）、地蔵尊（一基）の順となっている。

発表当日に提供した「伊勢原市内大山道道標分布図（資料№05－2を参照）」では、矢倉沢往還・東海道経由柏尾通大山道（この前二者は№01の手前で合流）・東海道経由四ッ谷通大山道・金井（金目）道の四つの道が、№035の地点の上粕屋・石倉不動堂で合流し、さらにその先で八王子道と合流していることがよくお分かりいただけるかと思う。また西方に目を移すと、十日市場（曽屋）道・蓑毛（小田原）道とも通じていたことも分かる。

最後に道標の素材について触れておくと、その殆どは地元産出の日向石である。日向石は凝灰質砂岩で、長期間に亘って風雨に晒されると脆く、表面が剥落する特性をもっている。今回の調査で痛感したことは、石碑が建立から約一五〇～二〇〇年以上を経過しているため、碑面に刻まれた文字を読み取ることは限界状況にあるということである。その意味で、今回このような道標悉皆調査を行えたことはまさに僥倖であった。その中で、伊豆石を用いて建立された宝暦三（一七五三）年の庚申塔（市内西富岡八幡神社境内）に刻まれた大山道道標（№06）は、燦然と光り輝くものがあった。

二　二の鳥居の建立をめぐって

①七五三引村とは？

あまり聞き馴れない「しめ引」とは一体どのような意味であろうか。国語辞典・漢和辞典等を駆使してその意味するところを示すと、漢字表記では、「標引・注連引・〆引・七五三引」とあり、神の居る地域、または特定の人間の領有する土地であるため、縄・紙等を張って（引いて）立ち入りを禁止すること、と記している。この際、藁を左縒りにして、藁の茎を三筋・五筋・七筋と順次に縒り放して垂らし、その間々に紙四手（しで・細く切った紙）を挟んで下げるとある。現地に関する記録では、江戸時代後期に編纂された『新編相模國風土記稿』の大住郡の項には、「小名、七五三引（之女比喜・しめひき）」とあり、さらに明治初期に編纂された『皇國地誌残稿』

には、「石尊華表(鳥居の別称)、現今アリ、石造ニシテ高一丈五尺、(中略)字南〆引、東〆引ノ間ナル大山道(四ツ谷通・田村通大山道)、中央ニアリ、往古ヨリ大山へノ注連(しめ)ト称シ、六月二十七ヨリ七月十七日マデ、石尊宮大祭中、此ヨリ内へ魚類ヲ厳禁セシト云フ」と記されている。これらをまとめると、二の鳥居が建立された伊勢原上粕谷の七五三村からは大山の神域と見なされ、大山例祭の際はここから山内に向けて〆縄を張り、村人は勿論のこと、参詣人までもが精進潔斎することを要求されたということになる。

②嘉永四年正月の役用留から

嘉永四（一八五一）年二月四日、先ず次のような趣旨の願書（趣意書）が、相模国大住郡上粕谷村の世話人である名主長左衛門ら四名から地頭（旗本）間部詮昌宛に提出された。その内容は、七五三引にある木造の鳥居が何年も前から朽ち果てたままになっているので、最寄りの村々の信心ある者たちが発起人となり、大山寺や近隣の村々とも相談して許可を得た上で石鳥居として再建したく、絵図面（≪図１≫、作成者は大坂西横堀の石屋源助）を添えて地頭間部氏にお願いする次第であるというものである。鳥居の建立に関しては、村方で勝手に建立することは御法度であり、その管轄奉行・知行主への申請・許可が必要とされた。大山の一の鳥居は東海道四ツ谷通大山道の入口にあるが、天保九（一八三八）年九月付の道中奉行及び地頭宛の石鳥居再建の願書（藤沢市大庭の中原家文書）が残存している。しかし、この七五三引の石鳥居の場合には、既述のように地頭間部詮昌宛の願書は確認できたものの、脇往還の管轄奉行である勘定奉行宛の願書は今現在確認できてはいない。

続いて紹介する同年十月廿一日付の廻章（廻状・廻文ともいう）によると、石鳥居の着工も近日となったので、手伝人足数や鳥居建立の勧化金（寄附金）を取り集めて発起人である山口佐(左)司右衛門（伊勢原を代表する自由民権家として著名な山口左七郎の曽祖父にあたり、現当主山口匡一氏の六代前の人物）方までお届け願いたい旨の連絡が各村の世話人宛に回覧されている。

村人たちが石鳥居の建立に熱い思いを馳せたのは、それなりの事由があったと考えられる。時折しも、世の中は幕末の混乱期にあり、国内では天保の改革が失敗して老中水野忠邦が失脚して先行きが不透明となり、浦賀には米・英の軍艦が相次いで来航するなど、内憂外患がますます現実味を帯びていた。そうした時代状況の中で、村人たちは石鳥居の左・右柱に「國土安穏」「天下泰平」という二つの文言（≪図１≫の④・⑩を参照）を刻み込むことによって、この混迷からの脱却を願求しようとしたのではないだろうか。

③絵図面・鳥居の左右銘等から

それでは石鳥居は一体どのようにして建立されたのであろうか。これを解明する手掛かりとしては、絵図面（≪図１≫を参照）、石鳥居の左・右柱の銘（≪図２≫・≪図３≫の①～⑫を参照）、上粕谷の山口匡一家所蔵文書（配布資料NO13を参照）がある。先ず絵図面からは石材として御影石（花崗岩ともいう。火成岩の一種で石英・カリ長石・白雲母又は黒雲母を含む。色は白色又は淡紅色をしているが、七五三引の鳥居は後者の傾向が強い。伝聞では岡山産万成石16屯）が用いられ、石鳥居の左･右の柱廻りは一尺六寸(48.48cm)とされた（≪図１≫を参照）。また、鳥居の下に埋め込まれた根石については、地元で調達したことも読み取れる。さらに、鳥居の台座（沓石・亀腹とも）の銘（≪図２≫の左柱⑥を参照）からは、鳥

居取次商人である江戸日本橋在住の近江神崎郡川並村商人（五箇荘商人、いわゆる近江商人）紅屋定右衛門（紅定）とその手代２名の斡旋で、大坂西横堀金屋橋東浜の石屋源助・安兵衛・芳助３名が石材の調達と加工・仕上げを請け負い、彼らの指導の下に地元伊勢原片町の鳶中が鳥居を建立したことも明らかである（≪図３≫の右柱⑫を参照）。なお、扁額（額束）の銘の「石尊大權現」（≪図１≫の上部を参照）は地頭間部詮昌が揮毫し、それに沿って江戸神田の助右衛門と石屋久次郎がこれを完成した（≪図３≫の右柱⑫を参照。なお、この扁額はかなり破損した状態で、山口匡一氏邸宅内の雨岳文庫資料館前に現存している）。さらに鳥居の付属物としての敷石は、地元日向村の石工として著名な勝五郎が担当した（同上）。

ところで、用材としての岡山産御影石はどのようにしてはるばる伊勢原上粕谷村の七五三引まで搬送されたのであろうか。その経過を雄弁に物語るヒントが、石鳥居右柱（≪図３≫の右柱⑨）にある。それには西浦賀の「西岸一番組水揚商人(21名で構成)」と称される気仙屋長七ら６名と、平塚の須賀船主田中庄兵衛ら６名の共同作業が介在したことを石柱の銘から読み取ることが可能である。さらに山口匡一家所蔵文書によると、大坂で船積みして海上輸送された石材は一旦浦賀に運ばれ、その後は相模湾を経由して相模川に入り、田村（現平塚市。ここは地頭間部氏の知行所でもあるとともに、東海道四ッ谷通大山道の田村渡し場でもある）で陸揚げされ、大山道に沿って搬送されたことも史料上で確認することができる（配布資料No.13.の上半分を参照）。

その他、石鳥居に関して注目すべきこととしては、この寄進者全ての名前を揮毫した人物が厚木町出身の斎藤利鐘（≪図２≫の左柱②の一番左奥を参照）という人物であったことである。彼は斎藤鐘助とも号し、天保二（一八三一）年九月に厚木を来訪して厚木を代表する文化人たちと交友した、あの渡辺崋山の手記である『游相日記』にも登場する人物で、「山本のお師匠さん」とも言われ、手習い・能書家としても近隣諸地域によく知られた人物である。彼は近隣の神社仏閣の扁額や碑文の銘を依頼されることがよくあり、七五三引の石鳥居が建立された嘉永四（一八五一）年には、五〇歳を数えた。

④大山鳥居寄附をめぐって

石鳥居の建立に際して最も重要なことは、何はともあれ勧化（寄附）金を如何に取りまとめるかにあるといっても過言ではない。そのためにどのような手続きが取られたかを窺い知ることができる史料として「大山御鳥居寄附」がある（金沢文庫古文書、配布資料NO12を参照）。この文書は嘉永四（一八五一）年六月に、発起人である山口佐次(司)右衛門ら５名が古くから大山の霊験があらたかであることを力説し、鳥居を再建して「天下泰平」「五穀成就」「萬民快楽」などを祈念するという趣旨で近隣の人々に寄附を呼びかけたものである。これに賛同して、既述した西浦賀の気仙屋長七ら５名の商人は一人一両ずつ、合計五両を寄進している。石鳥居の左・右柱に刻まれた人数は一四〇余人に達するが、人名が刻まれた者たちは最低でも一両以上六両以内の寄進者であること、これ以外の一両未満の寄進者も数多く存在したことが、山口匡一家所蔵文書によって判明する。寄進者全員をカバーするほどの奉加帳の発見には今現在至っていないが、二〇〇両（現在の金額にして約一六〇〇～二〇〇〇万円)前後の集金があったのではないかと推考する。寄進者の地域は、地元の伊勢原市内は勿論のこと、近隣の厚木・平塚・秦野市域、さ

らには横須賀市の浦賀にまで拡散している。その大半は各村の村役人クラスと思われ、その他は須賀船主・船頭６名、浦賀問屋商人６名、伊勢原市内外の商人10数名、大山御師萬善坊(別所町)、そして既述した厚木町の斎藤利鐘である。

⑤秦野小蓑毛の石鳥居

七五三引の石鳥居建立に遅れること五年後の安政六（一八五八）年六月、秦野小蓑毛にも右柱に「天下泰平」、左柱に「國土安穏」の銘をもつ石鳥居が建立された（配布資料№14参照）。建立の契機は七五三引の場合と同様であったと思われるが、両者には若干の相異点が見られる。それらを簡単に列挙すると、石材としては伊豆石が使用されていること、蓑毛側の大山御師・秦野の村役人それぞれ八名が世話人となり秦野の寺院七か寺や秦野・平塚地域の百姓を中心に吉田島（現開成町）・駿州（現静岡県）の百姓若干名、全体で七五名が連名していること、建立にあたっては信州（現長野県）の石工清兵衛が従事していること等が挙げられる（『秦野市史民俗調査報告書３　漂泊と定住・御師の村』、秦野市　昭和五九年発行）。

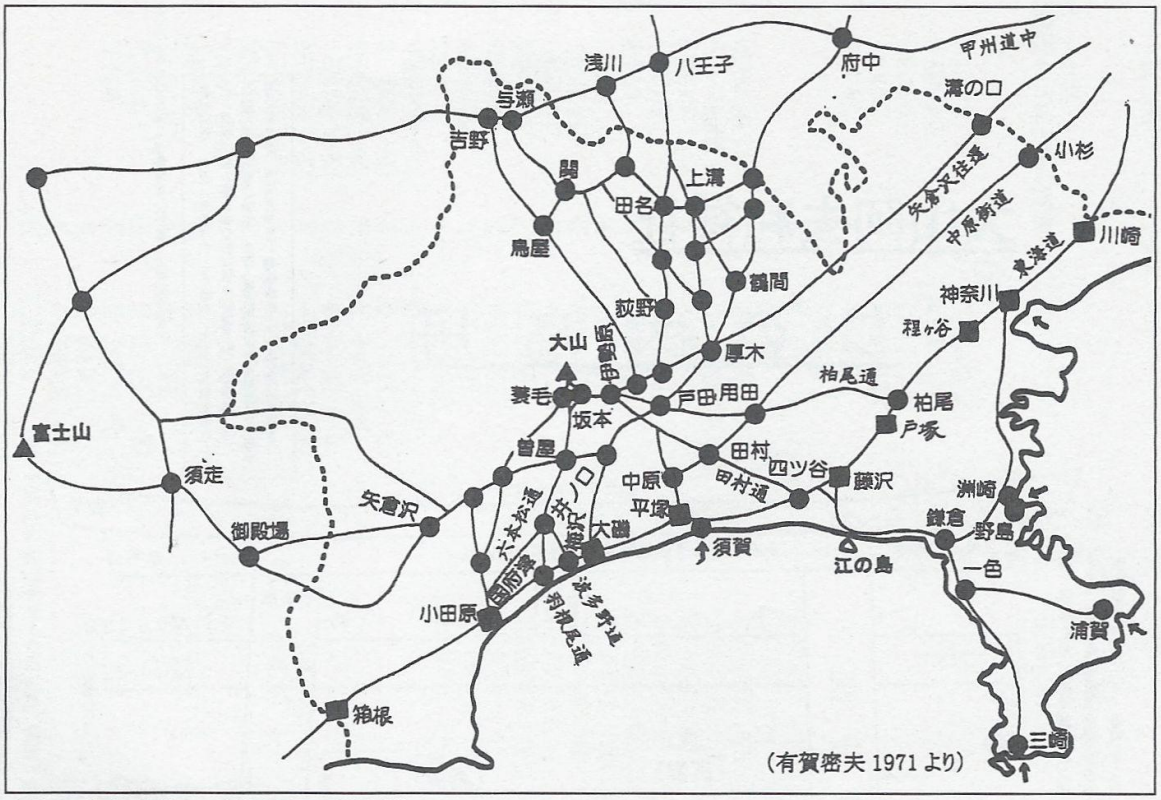
⑥石鳥居のその後

石鳥居は嘉永四（一八五一）年一一月に完成した。その後、三度に亘る嘉永六・七年、安政二（一八五八）年の大地震にも良く耐えてきたが、一九二三（大正一二）年九月一日の関東大震災により一時倒壊した。その後、石鳥居は地元民の手により復元されたが、一九六三（昭和三八）年四月、クレーン車が鳥居に接触するという不慮の事故によりまたもや倒壊に及んだ。その後、無残にも道路脇に放置されたままになっていたが、このままでは危険と判断し、県土木事務所により五霊（七五三引・〆引）神社内に撤去されたままになっていた。一九九一（平成三）年三月、嘉永四年時の石鳥居の世話人のご子孫である山口匡一・山田恒雄氏ら篤志家の手により、山口氏から敷地一部の提供を受け、石鳥居は大山が遠望できる現在地に復原された。

おわりに

県立七里ガ浜高校を最後に定年退職し、再任用として県立公文書館に勤務して早くも三年が過ぎようとしている。今回の発表は、伊勢原市文化財課による大山道道標悉皆調査や、公文書館の古文書所在調査（山口匡一家所蔵文書）の成果の一端を披露させていただいた。このような貴重な機会を与えていただいた神奈川県社会科部会日本史研究推進委員会各位に、記して感謝の意を表したい。併せて、先生方には公文書館内所蔵資料のご活用を切望する次第である。

【図１】大山への主要参詣道



（県立公文書館　小澤昭子氏提供）

【表Ⅰ】伊勢原市内大山道々標一覧（編年順）

NO	西暦年	和暦年	所在地	標記	種類	備考
1	1728	享保13	田中1161　耕雲寺境内	おふやまみち	庚申塔	矢倉沢往還・柏尾通大山道合流付近
2	1739	元文4	沼目・原の辻入口	大山道	道標	四ツ谷通大山道
3	1739	元文4	三ノ宮・能満寺境内	大山道	庚申塔	
4	1742	寛保2	日向・白髭神社前の辻	大山ミち	庚申塔	
5	1743	寛保3	上粕谷・五霊(〆引)神社境内☆	大山道	道標	四ッ谷通大山道
6	1753	宝暦3	西富岡830　八幡神社境内	大山道	庚申塔	
7	1756	宝暦6	下落合・八幡神社境内	大山□(道)	道標	
8	1751~1764	宝暦年間	日向・白髭神社前の辻	大山道	道標	
9	1764	明和元	日向ふれあい学習センター下	大山道	道標	
10	1792	寛政4	三ノ宮・保国寺地蔵堂	大山道	地蔵尊	十日市場(曽屋)道
11	1799	寛政11	上粕谷1141-2　山王橋際	大山道	道標	矢倉沢往還・柏尾通大山道
12	1807	文化4	日向地区→厚木市妻田銀鱗閣	大山道	道標	現在所在不明
13	1809	文化6	東富岡87の辻	大山道	道標	四ッ谷通大山道
14	1811	文化8	上粕谷・御伊勢森バス停付近	大山道	庚申塔?	八王子道
15	1822	文政5	大山字イヨリ　いより不動明王	大山町道	道標	小田原道
16	1833	天保4	小稲葉・八幡神社境内	大山道	庚申塔	
17	1835	天保6	下落合・長沼交差点	大山道	道標	柏尾通大山道
18	1843	天保14	沖小稲葉・八坂神社境内	大山みち	廿三夜塔	
19	1844	天保15	三ノ宮字下中島1680	大山道	庚申塔	十日市場(曽屋)道
20	1852	嘉永5	日向52-1　吉川宅内	大山道	庚申塔	
21	1857	安政4	日向字久保田984	大山道	庚申塔	
22	1862	文久2	東大竹・光明院境内	大山道	廿三夜塔	四ッ谷通大山道
23	1866	慶応2	日向薬師表参道	大山寺	道標	
24	1872	明治5	上谷の辻	大山みち	道標	
25	1881	明治14	小稲葉・新屋公民館	大山道	道標	
26	1902	明治35	高森・西ノ前	大山馬・かち道	庚申塔	矢倉沢往還
27	1906	明治39	西富岡1201-2　堀江宅内	大山	道標	八王子道
28	1912	大正元	岡崎4938	大山	道標	
29	1918	大正7	沼目・(株)ニッパツ駐車場内	大山	道標	四ッ谷通大山道
30	?	?	高森字獅子窪	大山道	道標	矢倉沢往還
31	?	?	粟窪220	大山道	道標	矢倉沢往還
32	?	?	下粕谷字弥杉咳止地蔵尊	大山道	庚申塔	矢倉沢往還
33	?	?	上粕谷441-8	大山道	道標	矢倉沢往還・柏尾通大山道
34	?	?	上粕谷1141-3　山王橋際	大山道	庚申塔	矢倉沢往還・柏尾通大山道
35	?	?	上粕谷・石倉不動堂◎	大山道	道標(円柱形)	合流
36	?	?	白根・松木酒店角	大山道	庚申塔	
37	?	?	串橋431　北東角	大山	道標	金目道
38	?	?	串橋字下の辻608-2	大山	道標	金目道
39	?	?	大山字イヨリ980-イ辺	大山道・大瀧道	道標(地蔵尊)	小田原道
40	1792	寛政4	大山ケーブル駅入口下	不動尊道	道標	大山山内
41	1808	文化5	大山阿夫利神社下社　女坂入口	女坂道	道標	大山山内
42	1840	天保11	大山689　松本宅　女坂分岐点	女坂・男坂・本宮・二重瀧道	道標	大山山内
43	1869	明治2	大山阿夫利神社下社　茶店東下	二重の瀧御社道	道標	大山山内
44	1876	明治9	大山・尾根道とかごや道合流点	御拝殿道	道標	大山山内
45	1881	明治14	大山ケーブル駅入口	不動尊道・阿夫利神社道	道標	大山山内
46	1899	明治32	大山689　松本宅　女坂分岐点	不動尊道	道標	大山山内
47	1911	明治44	大山・八意思兼神社境内	阿夫利神社下社・横頭本社	道標	大山山内
48	1912	大正元	大山・八意思兼神社境内	不動大明王・阿夫利神社	道標	大山山内

（再発見大山道調査団『2008(平成20)年度再発見大山道調査報告書』を基に作成）

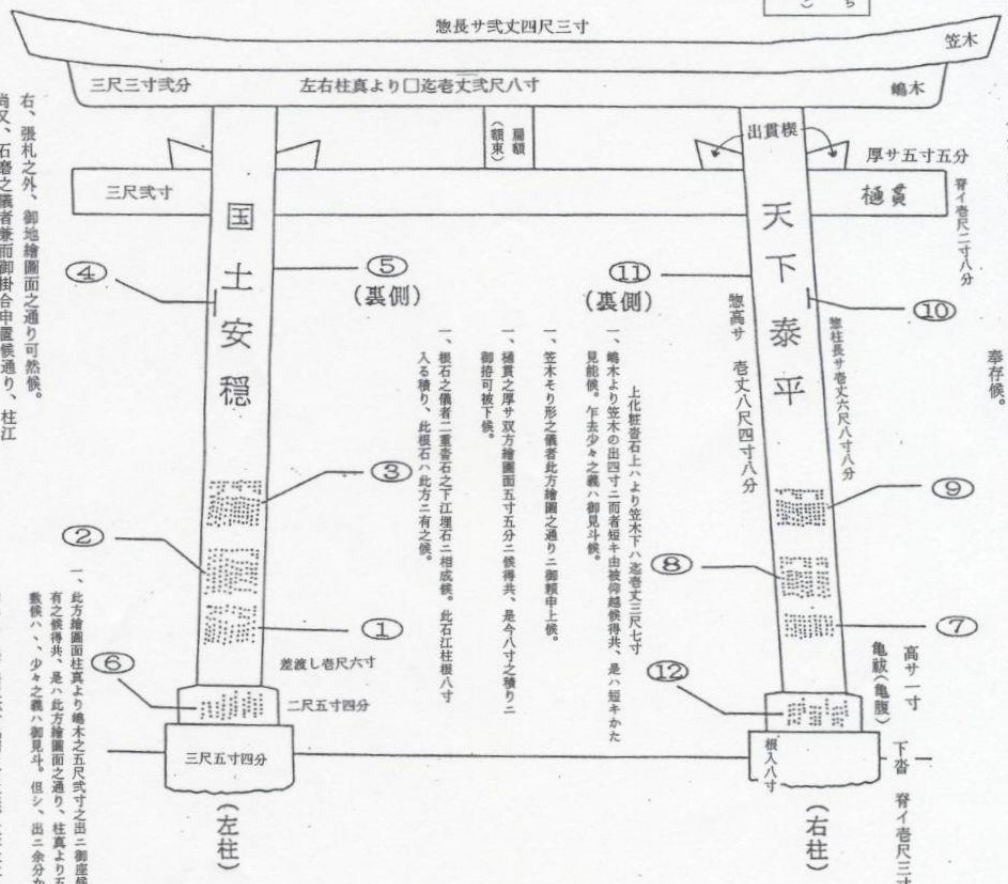
大山阿夫利神社

二の大鳥居

大山二の鳥居扁額（伊勢原市山口匡一家所蔵文書）

此龍の圖ハ七五（三脱）引ニ有之候。大山の鳥居の額のふち下タ圖也。額の書ハ越前鯖江城主間部下総守様書也。石尊大權現ト有之候也。（注ー現在雨岳文庫資料館前にあり）御一新ニ付、阿夫利神社ト相成候也。（この記は山口作助の手に掲ぐ）

《図一》御影石壹尺六寸鳥居十分之一圖（伊勢原市山口匡一家所蔵文書）



脊イ弐尺四寸余

此圖四寸ト有之候得者諸社御鳥居ハ今少々余慶（計）之出ニ相成候哉（ト）奉存候。

先方より印参り候。

寸尺

大坂より参り候繪圖面写

右、張札之外、御地繪圖面之通り可然候。

尚又、石磨之儀者兼而御掛合申置候通り、柱江細字等彫付候ニ付、格別念入極上之磨ニ仕上可被下候。

此段、呉々茂願上候。

上化粧沓石上ハより笠木下ハ迄壱丈三尺七寸

一、嶋木より笠木の出四寸ニ而者短キ由被仰越候得共、是ハ短キかた見能候。乍去少々之義ハ御見斗候。

一、笠木そり形之儀者此方繪圖之通りニ御頼申上候。

一、樋貫之厚サ双方繪圖面五寸五分ニ候得共、是今八寸之積りニ御拵可被下候。

一、根石之儀者二重沓石之下江埋石ニ相成候。此石江柱根八寸入る積り、此根石ハ此方ニ有之候。

一、此方繪圖面柱真より嶋木之五尺弐寸之出ニ御座候共、御地之繪圖面柱面より三尺三寸弐分と有之候得共、是ハ此方繪圖面之通り、柱真より五尺弐寸出ニ御頼申上候。尤拵方如何敷候ハヽ、少々之義ハ御見斗。但シ、出ニ余分かた見能候。

御影（石脱）壱尺六寸鳥居ト有之候。文字位之大キサニ而彫貫一字ニ付、

一寸四方　極算　五分

並ニ而　八分

中ニ而　壱匁壱分

上ニ而　壱匁弐分

此上ハ何程ニ而も

根入沓石江柱八寸入。此石此方ニ而出来致候。但し、厚ミ弐尺五尺角

根石御地ニ御座候趣承り居候。是ハ此二重沓石の下へ埋め被成候石哉。又ハ此一重目沓石之事哉。是又為念ニ候得者委細御申越可被下候。小店

石工大坂西横堀石屋源助

二の大鳥居建立にあたり、物心両面にわたって力を尽くした協賛者の名が刻まれている。その配置図は左の通りである。（なお、ここに彫刻された人名について、永い年月の風雪を経て磨耗しているため、読み違え、解読不可能な面々もあるかも知れませんので、訂正方御一報いただければ幸甚にございます。

《図2》大山一の鳥居（向かって左柱銘文）

左柱（④）

國土安穏

左柱（⑤）～背面～

嘉永四歳辛亥冬十壹月再建

左柱（③）

田村　福嶋庄三郎
同　石田嘉左衛門
同　古尾谷平兵衛
横内　小林富五郎
同　田中市衛門
（業原）
同　忠蔵
豊田　長尾茂左衛門
同　中戸川長左衛門
石田　内藤市五郎
西海地　今井利左衛門
入山瀬　阿藤新蔵
八幡　伊藤和助
下谷　亀井三左衛門
中原上宿　小嶋利右衛門
平間　神部七右衛門
見附嶋　重田重兵衛
大嶋　清田万右衛門
小鍋嶋　村役人
落合　成瀬彦七（1両）
同　原　九兵衛（1両）
同　清水小四郎（1両）
同　芦川新兵衛（1両）
同　宮川半兵衛（1両）
同　深川喜四郎（1両）
同　岩田与兵衛（1両）
同　関野英吉（1両）
同　日向　守屋定次郎
同　鍛代岡右衛門
同　同　権之丞
白根　越地萬蔵

左柱（②）

石クラ　山口彌之助
（神戸）　井手権八
同　吉川英三
同　高原屋弥右衛門
同　井手国太郎
同　忠蔵
同　廣田藤蔵
同　西野万右衛門
同　佐野八郎兵衛
大貫萬吉
同　斎藤仁左衛門
同　小泉峯五郎
同　大貫長左衛門
同　長島傳次郎
大貫藤蔵
同　西村權左衛門
同　□木
同　コヤス
ヌマメ
上カスヤ　麻生重兵衛（1両）
同　又右衛門（1両）
同　春五郎（1両）
笹子総左衛門（1両）
同　小宮傳右衛門（1両）
同　山田庄三郎（3両）
同　秋山傳右衛門（1両）
同　山田平右衛門（1両）
同　富蔵（1両）
同　利左衛門
同　市左衛門（1両）
同　平兵衛（1両）
同　角右衛門
同　田丸屋新兵衛（1両）
同　山田庄兵衛
弥作
同　大津亀次郎（1両）
同　小島傳十郎（1両）
（厚木）　斎藤利鐘拝書

沼目
神戸
イセ原
同
片町
同　上カスヤ麻生長左衛門（3両）
同　山田庄三郎（3両）
同　麻生文右衛門（3両）
同　山田彖右衛門（3両）
同　鵜川九兵衛（5両）
同　麻生善兵衛（5両）
同　麻生庄兵衛（5両）
同　原　儀左衛門（3両）
同　三橋奥右衛門（3両）
同　山田周蔵（3両）
同　清水屋利兵衛（6両）
同　斉藤紋次郎
同　高橋吉兵衛
同　高井金次郎

左柱（⑥）～亀腹～（台輪・亀趺・饅頭）

鳥居取次

江州神崎郡川並村
紅屋定右衛門
手代
茂助
忠助

鳥居石工

大坂西横堀金屋橋東兵
石屋　源助
安兵衛
芳助

《図3》大山一の鳥居（向かって右柱銘文）

右柱（⑨）

須賀舩主　田中庄兵衛
舩　龍口丸　庄左衛門
明栄丸　長七
頭　福徳丸　六左衛門
同　浦田繁右衛門
同　鳥海平左衛門
山際　中丸重郎兵衛
戸田　小塩八郎右衛門
厚木　富田屋忠兵衛（3両）
十日市場　佐藤安五郎
須賀　片倉弥右衛門
西浦賀　気仙屋長七（1両）
紀伊国屋六兵衛（1両）
同　伊兵衛
江戸屋六兵衛（1両）
大黒屋儀兵衛（1両）
和泉屋山三郎（1両）

右柱（⑧）

下柏屋　村役人（4両）
田中　村役人
大竹　村役人（3両）
大山　萬善坊
ヤナ　近江屋忠兵衛
東トミ岡　岩本新太郎
片マチ　西村甚兵衛
同　萬屋宇兵衛
上カスヤ　江戸屋平左衛門
オチハタ　芦川奥右衛門（2両）
同　関野四郎兵衛（2両）
イセ原　長嶋与兵衛
二見屋太左衛門
桐生卯兵衛
同　山崎屋七兵衛
同　近江屋宗兵衛
同　石井藤右衛門
同　伊賀屋藤右衛門
同　次兵衛
同　文左衛門
同　弥兵衛
松嶋屋吉右衛門
伊勢屋作右衛門
花屋清七
山崎屋清兵衛
小間物屋林蔵（1両）
大津元右衛門
斉藤宇兵衛（3両）

右柱（⑦）

栗久保　坪之内
善波　村役人
笠久保　串橋
田中　東富岡
下柏屋（3両）　西富岡
日向　大山
子安
板戸
三之宮
沼目
神戸
同　大竹（3両）
池端　北矢名
南矢名　真田
上柏谷郷
伊勢原
栗原　落幡（3両）
白根

右柱（⑩）

天下泰平

右柱（⑪）～背面～

當所
地頭間部藤原詮昌（饅頭）

右柱（⑫）～亀腹～（台輪・亀趺・饅頭）

額面石工

野呂与七（3両）
鈴木彦助
イセ原　加藤宗兵衛
スカ　後藤重右衛門
同　飯尾丑助
同　南ゴ商人中
□□
公所　宮崎左衛門
上カスヤ　山田七郎右衛門
下カスヤ　木村甚左衛門
江戸　神田　助右衛門
石屋　久次郎
南矢名　真田
上柏谷郷
伊勢原
栗原　落幡（3両）
白根

斃石石工

當國　日向村
石屋　勝五郎

鳥居建方

伊勢原
片町　髙中

※（　）内の金額は鳥居建立に際しての寄進額を示す。
（『かながわ風土記』第一六九号　山田恒雄「大山阿夫利神社二の鳥居復元由来記（中）」を一部改訂）